－袋井の歴史資料と古文書展－

袋井　江戸時代の風景

袋井の自然災害史展

展示解説

2012年

袋井市歴史文化館

「東海道五十三次　袋井遠州凧・三代広重？」

（縦 18cm、横 12cm）・当館所蔵

三代歌川広重の作ではないかと考えられている。丸凧ではないが、袋井凧が描かれている代表的な構図となっている。大きさは縦小版で、版元は網島亀吉（辻亀または辻岡屋）で、幕末に刷られた作品と見られる。

「東海道五十三次　袋井・二代歌川広重」

（縦 25cm、横 18cm）・当館所蔵

二代歌川広重の作品である。大名行列と女性の旅人、茶屋など袋井宿の代表的な図柄で構成されている。大きさは縦中判で、元治元年（1864）に刷られたものである。版元は山城屋甚兵衛（山甚）である。

「広末五十三次　袋井・二代国輝」

（縦 36cm、横 24cm）・当館所蔵

幕末に数多くの役者絵を残した二代国輝の作品である。鉄砲隊を中心とした大名行列を描いており、幕末の動乱期に相応しい構図である。大きさは縦大版で、文久三年（1863）に刷られたものである。版元は海老屋林之助（海寿堂）である。

「東海道五十三次　袋井・三代豊國」

（縦 37cm、横 25cm）・当館所蔵

役者絵を得意とした三代豊国の作品である。歌舞伎の忠信の姿を中央に大きく配置し、背景に袋井宿定番の図柄である田園風景が描かれている。大きさは縦大判で、幕末に刷られた作品と思われる。版元は住吉屋政五郎（蓬莱堂）である。

「諸国名所百景　袋井凧・二代歌川広重」

（縦 33cm、横 22cm）・当館所蔵

二代歌川広重が手がけた竪絵風景画の一つで、丸凧が上半分を占める大胆な構図となっている。図面下半には定番の田植えをする女性がいる田園風景が描かれている。右上のタイトルに「秋葉遠景　袋井凧」と記されており、背景に描かれた山が、秋葉山であることが分かる。また、現在袋井凧の一つとして丸凧が復元された参考資料にもなった浮世絵である。文久元年（1861）に刷られた縦大版の作品で、版元は魚屋栄吉である。

「東海道五十三駅　袋井・二代歌川広重」

（縦 25cm、横 16cm）・当館所蔵

二代歌川広重の作で、右上に「名ぶつ大凧」と書かれており、凧が袋井宿の名物であったことが分かる。中央には大木が配され、背景の山は秋葉山であろうか。縦中版の大きさで、慶応年間（1865～68）に刷られたと考えられる。

「高部村社中絵図」

（縦 28cm、横 40.3cm）・当館所蔵

現在の袋井駅周辺部に所在した高部村内の社の位置を描いた絵図で、年号はないが江戸時代後期ころに制作されたと推定される。18世紀に高部村を知行した旗本の渡辺鏑太郎の名前が書かれている。図中には社名が記載されていない鳥居が描かれた社が二箇所あり、法多道と原野川の位置から見ると、右の社は赤尾渋垂神社、左は袋井駅前にあったといわれている郡辺神社であろうか。現在場所が特定できない郡辺神社の位置を知るうえで貴重な資料である。

「山名郡一色村絵図」

（縦 40cm、横 60cm）・当館所蔵

寛政６年（1794）に作成された浅羽一色村の彩色された絵図である。絵図からは村の氏神様を祀る神社が村はずれの北と南に、西には中光寺の存在が分かる。北の氏神様は現在残されていないが、南の氏神様は津島神社と思われる。中光寺も現在廃寺にはなっているが、浅羽一色公会堂の位置にあったと思われ、墓石が残されている。

村の北側には原野谷川が流れていることが分かるが、現在は流路がかわり、鳥羽野排水路として残っている。なお、寛政年間の一色村は、旗本である菅谷氏により支配され、陣屋は西島村（磐田市）に置かれていた。

「梅田村絵図」

（縦 60cm、横 84cm）・当館所蔵

天保７年（1836）に作成された浅羽梅田村（現在梅山）の彩色された絵図である。絵図からは村の西はずれに現在も所在している八幡宮と春日宮、その東隣に常林寺、村の東はずれには万松院の存在が分かる。常林寺の北側には、権現宮も描かれている。

村の北東側にはおおきな川が描かれているが、弁財天川であろうか。なお、天保年間の梅田村は、横須賀藩西尾氏により支配されていた。

「木曽東海両道中懐寶図鑑」

（縦 15.8cm、横 11.3cm）・当館所蔵

奥付によると天保13年（1842）日本橋須原屋で発行された、東海沿線の名所を記載した小型版の携帯観光案内図である。上半分が東海道、下半分に木曽街道が描かれている。袋井宿付近では西から土橋の熊野権現社、木原の一里塚、川合（中川）橋、袋井宿、天の橋、油山（油山寺）、可睡斎、七つ森神社、久津部の一里塚などが描かれている。

「東海道名所図会」

（縦 37cm、横 262cm）・当館所蔵

江戸時代後期におこった旅ブームのなかで作成された、東海沿線の名所を記載した観光案内図の一つである。比較的大型の判なので、旅先に携帯したものではないと思われる。

絵図の表現はかなり省略されてはいるが、袋井宿付近では秋葉道や大鳥居（おおとりい）、背景に秋葉山（あきはさん）などが描かれており、当時の東海道五十三次の浮世絵（うきよえ）の絵柄と一致する。

「山田村入会地間数記載絵図（いりあいちけんすうきさいえず）」

（縦 70cm、横 89cm）・当館所蔵

本絵図は、山田村の入会地（いりあいち）（共同管理地）の広さが記載された、彩色（さいしき）の絵図である。年号の記載はないが、寛文（かんぶん）11年（1671）の友永（ともなが）村との入会地をめぐる争論以前の、江戸時代初期の絵図と思われる。

絵図は、山田村内の入会地である丘陵地や谷地形、山道や間道などが詳細に描かれている。

なお、裏面には中泉町（磐田市）の絵師五郎兵衛（ごろべえ）の名前が記されており、絵画資料としても貴重である。

命　山

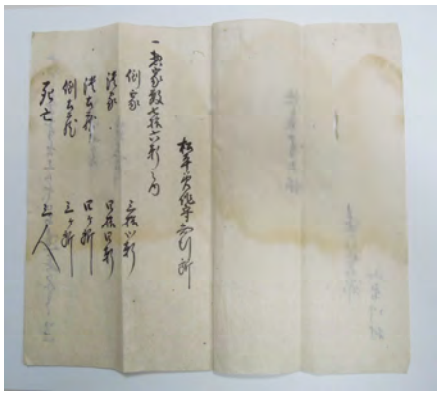
延宝８年（1680）８月６日に江戸時代最大といわれる台風が東海地域をおそい、暴風と共に、満潮時ともかさなり、押し寄せた高潮によって、中新田・大野・東同笠が水没し、老若男女約 300 人が死亡したと記録されています。

この災害が二度と繰り返されることのないように、村人達は横須賀藩の技術指導をうけて、高潮から命を守るための避難所としての築山（人工の小山）を築きました。現在、「大野命山」と「中新田命山」は、静岡県指定文化財となっています。

今回展示したジオラマは、発掘調査の成果から、「大野命山」を造る際におこなわれた独自の神事（地鎮祭）の場面を復元してみました。さらに、高潮が発生し、命からがら避難している村人達の姿も復元してみました。

このように「命山」は、高潮という災害から身を守るための先人達の知恵を知るうえで、貴重な文化財となっています。

「北原川村地震書上帖」



（縦 25.5cm、横 16.2cm）・当館所蔵

嘉永７年（1854＝安政元年）11 月に発生した地震の北原川村の被害状況を同年の 12 月に報告した古文書である。村の総家数 76 軒に対して、倒れた家 32 軒、潰れた家 44 軒、潰れた土蔵４箇所、倒れた土蔵３箇所、死亡者３人と記載されており、被害の大きさを知ることができる。

坂尻遺跡噴砂【白鳳期の噴砂】　　当館所蔵

『日本書記』天武天皇 13 年(684)10 月 14 日条に地震の記録が見られ、白鳳南海地震が発生している。坂尻遺跡の発掘調査では、7 世紀後半頃と推定される噴砂の痕跡を確認しており、白鳳東海地震の痕跡と見られる。

―袋井の歴史資料と古文書展―

袋井　江戸時代の風景

袋井の自然災害史展

〔展示解説〕

平成24年2月10日
編　集　袋井市歴史文化館